

建築論の諸相

朽木順綱 京都大学

本PDは、司会・市原出（東京工科大学）、副司会・田路貴浩（京都大学）による進行のもと、9月20日（土）9:00～12:30に開催された。なお、参考資料『建築論事典』（日本建築学会編）は、建築論・建築意匠小委員会の企画により、本PDに先立ち刊行された。

主旨説明

小林克弘（首都大学東京）『建築論事典』収録の多岐にわたる項目が示すとおり、建築論は極めて広い領域を扱う。本PDの標題の示す「諸相」とは、この広がりに伴うさまざまな可能性と限界とを含意する。事典の企画にあたり、体系化された完結性よりも、建築論の現在を映すような、開かれた議論のための契機となることが意図されたように、本PDが今後の建築論への刺激となるよう期待したい。

主題解説

- 1. 建築論の主題の変遷：岸田省吾（東京大学）** 建築論の主題の変遷とは、時代ごとに共有された建築制作のための共通基盤の変遷と言える。古典古代には、宇宙や神の秩序に造形の根拠が求められ、17世紀には、制作理論の基盤は古典的な超越的理念から、絶対的な美を否定する現実的、恣意的な根拠へと変容した。そして、建築制作の原初を絶対的規範から建築家個人の構想に求めようとする態度変更が試みられながら、古典的規範もまた批判的に受容されることで、近代は開かれた。翻って現代の建築思想をみれば、建築家たちは各々の課題を各々の方法で解くことへと向かい、共通基盤としての建築論の意義は残されていないかに思える。しかし上述の転換を通して見出すことができるのは、既に在るものを根拠とする問いから、現れつつあるものを見定める問いへの移行であった。このことが建築論的態度であると言えるならば、現代にもなお存在から生成への問いとして共有可能な、建築論の可能性が開かれていよう。
- 2. 現代の住宅論・都市論からみた建築論の可能性：奥山信一（東京工業大学）** 現代日本の建築家による住宅観と都市観の両者には、それぞれ別な、固有の特質が見出される。すなわち住宅観には、相反的な内部と外部の関係についての「領域」的思考が伴い、都市観には、自律的な部分と全体の関係についての「構成」的思考が伴う。前者はある内部を閉じ、限定することに関わり、また後者は展開し、多様化することに関わる思考である点で、両者は対照的である。この点で、日本の住宅観には、ややもすると「構成」的思考が欠如するように思われ、都市観においては、都市を「領域」的思考で捉えることなく、俯瞰的に扱うのみであるように思われる。しかし、とくに近年わが国の建築家が主題化しつつある集合住宅や、都市の内部、つまり都市における人間の視点の回復という課題に対しては、両者の思考がともに携えられ臨まれねばならないだろう。
- 3 建築家と建築論 富永譲（法政大学）** 建築家において建築論的問いはいつ、どのように現れるか。とくに彼が建築家を志す誕生期と、自らを反省し振り返る晩年とが注目される。例えば、若きル・

コルビュジエによる『東方への旅』は、彼が生涯にわたり探求し続けた建築論的問いの原初である。純粋な驚きや衝動をもって出合われ、思いのままに書き留められた建築の力は、多様な活動期を経てつねに希求され続けた。また前川國男の場合は、晩年になって技術的アプローチからの離脱が試みられ、出自たる日本建築に根をもつ、透明性や水平性という独自の空間的特質が現れはじめた。建築家による建築論とは、彼自身の肉体や手触りを伴って経験される次元、すなわち言語の背景に潜む次元に立ち返って理解されねばならない。なぜなら、ここに彼の建築論がはじめて立ち現れるからである。その意味においてこの2人の建築家は、自らの建築論の生成へ向けてそれぞれ固有の遡行を企てたと言える。

4. 建築論の方法概念 前田忠直（京都大学）『建築論事典』の第1部にまとめられた「方法」と「領域」は、以下の4つの項目群に大別することができる。すなわち①空間的な主題（領域1）、②歴史的な主題（領域2）、③人間的な意味世界への問い（方法1）、④制作への問い（方法2）である。そのうえでさらに、「方法の方法」が問われる。この領域はいわば哲学に通じ、問いの根本的態度を形成するが、上述の2つの「領域」と2つの「方法」とは、ここに重層化される。事典中、「現象学」「存在論」の項目は、こうした「方法の方法」として解説される。このことについて、芭蕉の言葉「不易流行」を紹介したい。「流行」とは無際限な個々の表現や、日常世界をいう。これに対し「不易」とは、こうした日常性に楔を打ち込む垂直的契機、人間の真実あるいは原初への遡行的問いの態度を示す。問いそのことを自覚的に問う、こうした自乗的構造を、建築論が本来的に含意している「方法の方法」として理解したい。

討論

小委員会委員を中心に、建築論に固有な知の垂直性の問題、個別の論（現象）と本質的問いとの関わり合い、制作における直観の構造や身体の所在、つくりながら考えるという自己反省的な作用などについて、各自の見解が述べられた。議論に通底するのは、『建築論事典』そのものの項目にすでに「建築論」が含まれているという、自乗的かつ運動的な思索であろう。また、近く期待される事典の増補版に加えるべき項目について、意見が交わされた。

まとめ

入江正之（早稲田大学） 各解説には共通して、建築的思索における、生の経験世界への反省を見出すことができる。建築論が相関する理論と制作の両者は、この反省的態度によって、ともに「〈生きられる〉空間や時間や世界についての報告」（M・メルロー＝ポンティ）となるかぎり、相克なくそれらの深淵において和合するだろう。このとき、世界について思惟するそのことがすでに建築することであるとして、建築論の可能性が示唆されているのではないだろうか。